【４】

書房といふのは、書房とは少しタイプをにした男だ。は五十のをしたであらう。つぎはぎの朝服のパヂに服の上衣を着て、中々スマートなロイド鏡を掛け、土耳古のやうなものをの上にせてゐる。それはい學生のひさしの取れたものと知れた。は朝からまでを拾つてゐる。

「それを拾つてどうするんです」

「板頭房にきまさあ。そしたら突がとてもまりますぜ」

「そんなに山くんですか」

「いてつたら賈りまさあ」

「そのお金はどうするんですか」

「障子紙を買つたり――お金があれば何かに使ひ道がありまさあ」

書房は金をへるところまでは知つてゐるが、使ひ道まではへたことがないやうであつた。それもそので、板頭房にゐれば、ふにはらず、さん達の着しやボロをぎ合わせて着物にすれば、服を買ふといふこともあり得ない。

「書房はおかみさんはありませぬか」

「そんなものありませぬや」

「おかいさんはひですか」

「一度つて子も出來たが、壬戊のにんでしまひやしたよ」

「またう氣にはなりませぬか」

「臭いから止めちやいやしたよ」

　中々のよい振りである。

「さんはさんではないですか」

「一時は主になつて十年許りもへやしたよ。しかしそれも臭いから止ちやいやしたよ」

これは大だとつた。

それかといつて、さんは決して懶け者でない。も勤さにおいては書房と一對だ。實によく歩きつては、實によく枯枝を集めて來る。一本だつて決してからりはしない。たゞ落ちてゐるのを拾ふだけである。

書房でい出したが、私は子をつれてよく貞陵の松林の中をうろついた。大市の近所とははれない邃なところだ。松のはだ若いが、溪も相も相當なものである。しかもつゝじの名所で、實にるにつゝじがある。溪川のせゝらぎも小鳥のもかれる。

さて、このの松で必らず出遇ふ一人の人がある。はどうしても八十をしてゐるにひない。この人は毎日をもつての松にび入つては、を拾ふと見せて、いろいろな木を切るのだ。まだ葉が開いてゐないから、生木でもと見せるつもりなのであらう。三本あるものゝ中から一本を切るといふやりかたであるが、それが毎日と來るからは一本殘らず切つてしまふ定になるだ。

ところが或日、私は、この人が實に殘なことをしてゐるのに出つた。それは先でぽつりぽつり地に現はれた松の木のを切ることであつた。

「お爺さん。そんなことしたら松が枯れるぢやありませぬか」

私ははずした。

「土の上に出てゐるものだけを切り取るんだから、松が枯れるやうなことはないよ」

と、この人は私をんで高にき出し、一活潑に松のを切る作を行するのであつた。

「もしもし。土の上に出てゐるを切つて了つたら土の下に殘つたも役に立たぬぢやないですか」

　私もしつこくかゝつて行つたのである。（『京城日報』1940年5月21日）